

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	c o m p a s s			
○保護者評価実施期間	令和7年12月11日 ～ 令和7年12月29日			
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	26名	(回答者数)	23名
○従業者評価実施期間	令和7年12月22日 ～ 令和8年1月15日			
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	8名	(回答者数)	8名
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年1月30日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	子どもを中心とした視点を基盤に、支援プログラムを体系的に構築し、支援の質の深化が図られている	子どもの特性や発達段階、生活背景を踏まえ、行き当たりの支援ではなく、目的やねらいを明確にした支援プログラムを構築している。 個別支援計画と日々の活動内容を関連づけ、支援の一貫性と継続性を意識した関わりを行うことで、子どもの行動面・情緒面・対人関係において段階的な成長が見られている。 また、支援の振り返りを通じて内容を随時見直し、支援が形式化しないよう工夫している。	支援プログラムの意図やねらいを職員間で共有し、経験や専門性の違いに左右されない支援の質の均一化を図る。 また、子ども自身が活動の意味を理解し、見通しをもって参加できるよう、プログラム内容をわかりやすく伝える工夫を行う。
2	年齢やニーズに応じた個性の高い支援を行い、安心して挑戦できる環境づくりができています	子ども一人ひとりの理解度や気持ちの状態に応じて支援内容や関わり方を調整し、無理のないペースで活動に取り組めるよう配慮している。 「できた」「やってみよう」と感じられる成功体験を積み重ねることで、自己肯定感や主体性の育成につながっている。	支援の優先順位を整理し、個別支援が必要な場面をより明確にすることで、子どもにとって効果的な支援時間の確保を行う。 個別支援と集団活動のバランスを意識し、状況に応じた柔軟な支援体制を整える。
3	異年齢交流や集団活動を通じて、社会性や協力する力を育む支援が行われている	異年齢の子ども同士が関わる場面を意識的に設定し、年上児が年下児を気遣う経験や、年下児が安心して関わる関係づくりを支援している。 遊びや活動を通じて、相手の気持ちを考える力や、助け合う姿勢を育む機会を提供している。	親子で参加できる行事や交流の機会を取り入れ、家庭と事業所が連携して子どもの成長を支えられる体制づくりを進める。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	支援プログラムの安定化が進む一方で、子どもの成長段階や慣れに応じた再構築が必要となっている	支援プログラムが体系化され、一定の成果が見られる一方で、長期利用児にとっては活動内容が「慣れたもの」となり、新たな刺激や挑戦につながりにくくなる場面が見られる。 これは支援が定着してきたことの裏返しであり、成長段階の変化に応じたプログラムの再構築が求められていると考えられる。	子どもの発達や経験の蓄積に応じて、既存プログラムを発展的にアレンジする視点を取り入れる。 「内容を変える」のではなく、「目的やレベルを段階的に高める」ことで、支援の質を維持しながら新たな学びや意欲につなげていく。
2	柔軟で個性の高い支援を行う中で、支援の意図やねらいが職員間で共有しきれない場面がある	個別支援を重視する中で、職員それぞれの経験や判断に基づいた関わりが増え、支援の意図や背景が十分に言語化・共有されないまま進む場合がある。 結果として、支援の方向性は合っているが、職員間での理解に差が生じる可能性がある。	支援の工夫や成功事例を振り返る時間を確保し、「なぜその関わりを行ったのか」を共有する機会を設ける。 支援の属人化を防ぎつつ、事業所全体としての支援力向上につなげていく。
3	子どもの主体性を尊重する支援の中で、挑戦への一歩を後押しする関わりバランスに課題がある	子どもの気持ちやペースを尊重する支援を重視するあまり、挑戦の機会が控えられる場面がある。 安心を大切にする支援と、新しい経験への後押しのバランスを取ることが課題となっている。	子どもが安心した状態で小さな挑戦を経験できるよう、段階的な目標設定や声かけを工夫する。 成功体験を積み重ねる中で、「やってみよう」という気持ちを自然に引き出す支援を行う。